

「出版社名」という情報について

東理大 理工 細井 勉

データベースのなかの書誌情報において、出版社名は、決して軽く扱われてはいないが、かといって、かならずしも、検索時の主要なキーになるものだと思われてはいないであろう。しかし、検索のキーとなり得ることを述べ、問題点をコメントしておきたい。

昔とくらべて大学の教科書水準の単行本がふえてきた今日、すくなくとも実験的な段階では、その種の単行本に属するデータベースも考えられてよいであろう。それは教師が教材を調べるのに役立つだけでなく、学生が参考書を探すのにも、また、学生がIRの経験をつむのにも有効であろう。

一方、学生と話していると、実際に読んだ本を説明するのに、本の形態、表紙の色、出版社名などは同定できても、著者名を同定できない場合が多い。このことは、教師でさえも絶対にありえないこととはいいきれない。

そこで、出版社名や、表紙の色がキーとして指定される場合が生じる。

出版社名に関しては、図書カードの作成法などで、あいまいでない同定法が用意されていることであらうが、一応、つぎの2点について注意をうながしておきたい。

1. 名称のとり方、略記法などについての標準化。
2. 社名の変遷についての知識のとりまとめ。

学生に頼んで、図書カードをもとにして、出版社別の蔵書数を調査してもらったとき、すくなくとも、つぎのようなミスが観察された。

- (i) Springer, Springer-Verlag を別扱いした。
- (ii) Wiley, John Wiley & Sons, Wiley Interscience を別扱いした。

こまかく調べれば、この種のミスはもとと見つかると思われる。この種のことは専門家には自明のことであらうが、検索と学生などにさせるとしたときには問題とならう。

単行本はかなりに少数の出版社に集中しているので、問題の解決はちょっとの作業で終ると思われる。したがって、今から対策を考えておくほどの問題ではないと思うが、一応、問題の存在について、コメントだけしておく。